

1920年の日記とバーベリのユダヤ性

嵐田 浩吉

序

1920年4月、独立を回復して間もないポーランドは、失地回復を狙い、ウクライナへの総攻撃を宣言し、ポーランド戦争が始まる。バーベリはこの年の春、ポーランド戦線に向かうべく、南ロシア通信の特派員の資格を手に入れると、夏頃から、すでに半ば伝説と化していたセミョーン・ブジョヌイ將軍麾下の第一騎兵隊に従軍し、ウクライナからポーランドにかけて各地を転戦していく。バーベリの任務は、『騎兵隊』の語り手と同じように、「赤い騎兵」紙に記事を書き送ったり、第一騎兵隊を構成していたコサック兵たちに政治教育を施したりすることであった。バーベリにとり、この従軍は想像以上に厳しいものであった。抽象的な革命の理念を抱き、文明世界からやって来た知識人である彼にとって、それは魂を震撼とさせられるような日々の連続だった。そうして彼は、同年の末までに、「すっかり疲れ果て、しらみだらけで、ひどい喘息にかかって」り、故郷のオデッサに戻ってくるのである。

この第一騎兵隊従軍は、バーベリにとり、はかり知れない意味をもった。それは、人間としてのバーベリを成長させただけではない。作家としてのバーベリも、この従軍体験抜きにしては考えることができないのだ。というのは、この従軍体験から、彼を一躍有名にした『騎兵隊』が生み出されることになるからである。この『騎兵隊』を考える場合、彼が従軍中につけていた日記を看過するわけにはいかない。この日記は、後に『騎兵隊』で用いられることになる人物や場面が書き込まれているだけでも、第一級の価値を有するのだが、それだけでなく、この日記は、『騎兵隊』の、さらにはバーベリの創作全体を貫く大きなテーマのひとつを考える上でも非常に有効なのである。そのテーマとは、バーベリのユダヤ性である。周知のように、バーベリ自身、ユダヤ人であり、生涯、自己のユダヤ性を強烈に意識していた彼の創作には、ユダヤ性が濃厚にしみ込んでいる。そこで、拙稿では、この従軍中の日記から、バーベリが転戦していくさきざきで出会うユダヤ人に対してどのような感情を抱き、彼らに何を求め、何を見出したのかという問題を論じながら、バーベリのユダヤ性がどのように表われているのかをみていくことにしたい。尚、個々の登場人物や場面からみた日記と『騎兵隊』との関係も非常に興味をそそられる問題だが、

拙稿では、あくまでも、上記の問題を中心にみていくことにしたい。

1

バーベリが1920年の従軍中につけていた日記だが、まずは、この日記がたどった運命についてみてみよう。この日記が現在まで伝わったのは、幸運としか言いようがない。というのは、1939年にバーベリが逮捕された時、彼の手元にあった原稿や書簡や日記など、貴重な資料すべてが内務人民委員部によって没収され、今ではそれらがどこかに保管されているのかどうかさえ不明だからだ（おそらく、処分されてしまったのだろう）。しかし、1920年の第一騎兵隊従軍中の日記は、バーベリが草稿や手帳とともに1927年頃、キエフの友人に預けていたために²⁾、現在まで残ることができたのである。しかし、この日記の存在は長い間知られることはなかった。この日記の存在が知られるようになったのは、1950年代半ばに、草稿や手帳とともに、彼の未亡人 A. H. ピロシコヴァの手に移ってからであった。この日記は、厚いノートに、ケミカルペンシルで、長短様々な文章がびっしりと書き込まれたものだった。しかし、残念ながら、この日記は完全な形で残されていたわけではない。残されていたのは、1920年6月3日³⁾から9月15日までの分で、最初の54ページと、6月6日の途中から7月10日までの分にあたる67ページから87ページまでが散逸してしまっていたのである。しかし、残された部分だけでも、この日記が第一級の資料であることに変わりはない。

次に、この日記の公刊についてであるが、この日記が公刊されるにはさらに長い歳月が必要であった。この日記が初めて公に言及されたのは、バーベリの名誉回復後、初めての彼の作品の出版となる1957年の『選集』におけるエレンブルグの序文においてであったが⁴⁾、日記が完全な形で活字にされるには、さらに30年以上の歳月を要した。この間、1965年には H. A. スミーリンがその論文でこの日記を断片的に使用し⁵⁾、1971年にはピロシコヴァと C. ポヴァルツォフが日記の一部を公にし⁶⁾、グラスノスチ後の1989年には、それまでよりも多くの部分が「諸民族の友好」誌に2号にわたり掲載された⁷⁾。そして、1990年によりやく、これまでで最も浩瀚なバーベリの二巻本の著作集で、初めて完全な形で活字にされたのである⁸⁾。

この日記は、単なる日記以上の意味を持っている。というのは、バーベリは後の創作を意識して、この日記をつけていたからだ。それを端的に表わしているのが、「～を描写すること」「～を記憶に留めること」といった言葉が日記の中に幾度となく書き込まれていることだろう。つまり、彼は第一騎兵隊従軍中に遭遇した出来事を単に羅列していただけではなかったのだ。彼は後に取りかかることになる創作を常に意識し、その主題となるべきものに眼を向け、すでに書くべきことを選択していたのである。このあたりの事情を、

C. J. エイヴィンズは次のように説明している、「バーベリは、これらのメモを書き留めながら、それらを役立てるつもりだった目的、つまり、戦争が終わったら、これらのメモから創り出すつもりだった小説をほとんど常に意識していたように思われる。日記の記述が、バーベリの小説と比較すると、生の素材のように読まれるとはいえ、それらは文字通りの意味で生のままなのではない。バーベリは何が強調に値するのか明確に理解していたのであり、彼は恐怖のただなかで、グロテスクなディテールと潜在的な美との審美的な共鳴に常に注意を怠らなかつた。彼は出来事だけでなく、本質をも追求していたのである」⁹⁾。

たしかに、この日記にいかにも『騎兵隊』と共通する人物や場面が書き込まれているとはいえ、この日記はまだ『騎兵隊』の草稿ですらない。また、バーベリが、エイヴィンズの言うように、「何が強調に値するのか明確に理解」するまでには、それなりの時間が必要であっただろう。しかし、それでも彼は、後の創作を常に意識しながら、自分の眼にしているものの本質を追求していたのである。このように、実際の作品とははじめから密接に結びついているのが、バーベリの従軍中の日記なのである。このような日記がいかにも大きな価値を有するかは、説明の必要がないだろう。

2

次に、バーベリが第一騎兵隊とともに転戦した地域だが、それはヴォルイニとガリツィア、現在のウクライナからポーランドにまたがる地域であった。バーベリが転戦した地域がヴォルイニとガリツィアであったということは、きわめて大きな意味を持った。というのは、この一帯にはユダヤ人が非常に集中していたからだ。ここで、この地域にユダヤ人が集中するようになった歴史的経緯に簡単に触れてみよう。

ポーランドには、13世紀頃からキリスト教ヨーロッパの迫害を逃れて、西から南から続々とユダヤ人が流入するようになったが、最も多い時期には、世界のユダヤ人人口の80パーセントがこの国に住み、ポーランドはユダヤ人にとって“約束の地”と言われていたほどであった。一方、ロシアが大量のユダヤ人を抱え込むようになったのは、周知のように、1772年から始まるポーランド分割によってであった。それまで、ロシアは帝国領内からできるだけユダヤ人を締め出そうとしてきており、ポーランド分割と同じ18世紀には、すべてのユダヤ人にロシアからの退去命令が出されたほどであった。ところが、ポーランド分割後、ロシアは世界有数のユダヤ人人口を抱える国になったわけだが、しかしだからといって、反ユダヤ主義的な政策が変わったわけではなかった。ロシア帝国は領内の南西部に設定した“居住地域”にユダヤ人を押し込め、彼らに様々な制限を加えたのである。ユダヤ人に対する居住制限は、1917年3月に臨時政府によって撤廃されたが、“居住地

域”が置かれていた場所にユダヤ人が密集していたという事情はポーランド戦争当時も変わりはなかった。ポーランド戦争に従軍したバーベリは、国内でも特にユダヤ人の密集するこうした地域を転戦していったのであり、さらに彼は国境を越えて、同様にユダヤ人の密集していたポーランドへと進んでいったのである。

また、バーベリが転戦した地域は単にユダヤ人が多かったというだけではなかった。そこは、住民全体に占めるユダヤ人の比率も非常に高かったのである。例として、日記にその名が記されている、バーベリが実際に訪れた町をいくつか挙げてみよう。バーベリが訪れた1920年の数字は分からないので、その頃のデータを挙げておくが、例えば、ジトミルは総人口68,280人（1926年）のうち、39.2パーセントがユダヤ人で、プロディは総人口10,867人（1921年）のうち66パーセントが、ロヴノは総人口30,842人（1921年）のうち71パーセントが、ユダヤ人によって占められていたのである¹⁰⁾。これらの地名はそれだけで、東欧ユダヤ人の歴史に通じた者にとっては、古き東欧ユダヤ人の世界を彷彿とするに足るだけのものがあるだろう。また、バーベリ自身、「ユダヤ人のシュテートル」¹¹⁾ (386) と言っているデミドフカというところは、1897年のデータでは、住民679人のすべてがユダヤ人であり、彼は従軍中にシュテートルの世界をも目の当たりにしていくのである。

こうしてバーベリは、ヴォルイニヤガリツィアを転戦している間、いたるところで自分と同じユダヤ人に出会うことになるのだが、この当時、ヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人たちはどのような状況に置かれていたのだろうか。

ヴォルイニヤガリツィアの住民は、ユダヤ人に限らず、第一次世界大戦から戦禍に巻き込まれ、それに続く国内戦においては、さらに大きな犠牲を強いられていた。この地域は、赤軍、ポーランド軍、さらにはそれ以外の反革命軍の争奪戦の対象となり、住民は繰り返し略奪や虐殺の対象となったのである。ユダヤ人はその中でも最大の被害者であったと言えるだろう。反革命軍のユダヤ人迫害にはすさまじいものがあった。そこには、歴史的な反ユダヤ観だけでなく、反革命軍に流布していた、ユダヤ人はすべて共産主義者であり、ポリシェヴィキ政権はユダヤ人の政権であるという噂も作用していたのだろう。そうした状況にあったヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人たちの多くは、バーベリが第一騎兵隊とともにやって来たポーランド戦争当時、解放者として赤軍を待ち望み、その到来を歓迎した。歓迎しないまでも、バーベリが日記に記している通り、「ポーランド人のもとで白パンを食うよりも、ポリシェヴィキのもとで飢えた方がまし」(432)と考えていたのであった。ところが、彼らが期待をかけていた赤軍、第一騎兵隊のコサック兵たちはどうだったであろうか。コサック兵たちはポーランド軍と大差はなかった、いやむしろ、ポーランド軍と同じように、残虐な行為を繰り返し、現地のユダヤ人の期待を裏切ることになったのである。コサック兵の中に「原則を持った獣」(413)を見出したバーベリの日記

にも彼らの野蛮で残虐な行為は幾度となく描かれ、また、「ユダヤ人たちは略奪を受けた、当惑、解放者としてソヴィエト政権を待っていたのに、突如として、叫び声、革鞭、ユダヤっぽの声」(369)、「我々はどのように自由をもたらしめているか、恐ろしい」(416)といった言葉が、コサック兵の行状を象徴的に物語っているだろう。迫害を加えるという点では、ユダヤ人にとって、軍隊の違いはなかったのだ。バーベリも8月28日の日記にこう記している、「憎悪は同じで、コサック兵も同じ、残酷さも同じだ、軍隊は異なるなんて、なんというたわごとだ。シュテートルの生活。救いはない」(424)。まさに、「不幸なユダヤの住民」(377)、「不幸なガリツィア、不幸なユダヤ人たち」(422)であったのである。

ちなみに、こうしたコサック兵たちのあまりにもひどい野蛮で残虐な行為を見せつけられたバーベリは、革命自体を次のように見ていくようになる、

「これはマルクス主義革命ではない、これはすべてを手に入れ、何も失うことを望まないコサックの暴動なのだ」(409)

「革命ではなく、野蛮な自由の民たちの蜂起である」(419)

そして彼は、次第に革命の将来にも懐疑を抱くようになり、日記にも、「革命の運命について考え、気がふさぐ」(420)といった言葉がみられるようになるのである。

話が逸れてしまったが、バーベリはこうして、従軍中、迫害にあえぎ、“救いのない”状態に置かれていたユダヤ人たちといたるところで出会うことになるのである。バーベリはそうしたユダヤ人たちとどのような関係にあり、彼らに対していかなる感情を抱いたのであろうか。次に、この点についてみていこう。

3

バーベリとヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人との関係であるが、この関係は当初より複雑なものとならざるを得なかった。それはバーベリ自身に起因するものであり、バーベリは、『騎兵隊』の語り手と同じように、本名ではなく、キリール・ヴァシーリエヴィチ・リュートフというロシア人名で従軍していたのである。つまり、彼は自分がユダヤ人であることを隠していたのだ。

バーベリが本名ではなく、ロシア人名を用いたのには、第一騎兵隊のコサック兵との関係を円滑にし、自分の身を守ろうとする意図も働いていたのだろう。というのは、コサックたちは反ユダヤ感情で知られていたからである。たしかに、バーベリの意図した効果もそれなりにみられたであろうが、しかし、彼は、ユダヤ人であることを隠すことが、転戦していくさきざきで出会うユダヤ人との関係を複雑にするとは予見していなかっただろう。ユダヤ人であることを隠すということは、現地のユダヤ人たちにとって、バーベリは

自分たちに迫害を加えるコサック兵の一員であるということになり、バーベリは同胞に加えられる迫害を眼にしながらも、ロシア人のふりをしていなければならないのである。ここから様々なドラマが生まれてくることになるわけだが、この“ロシア人の仮面をかぶったユダヤ人”という『騎兵隊』を貫くモチーフのひとつが、日記には生の形で表わされているのである。

このように、転戦していくさきざきで出会うユダヤ人に対してそもそも複雑な関係にあったバーベリだが、彼が現地のユダヤ人に対して抱いた感情にも複雑なものがあつた。彼は、ヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人に対して、吸引と離反という矛盾した感情を同時に抱くようになるのである。彼はどのようにして、このような矛盾した感情を抱くようになったのであろうか。それぞれの感情について、以下でみていこう。まずは、バーベリが現地のユダヤ人にいかに引きつけられたか、ということだ。

バーベリが現地のユダヤ人にいかに引きつけられたかということに関しては、第一騎兵隊従軍中、バーベリ自身がどのような状態にあつたかということを考えなければならないだろう。彼は、第一騎兵隊のコサック兵の中にあつて、孤立していた。いかにコサック兵の中にとけ込もうとしても、ユダヤ人であり、知識人である彼は、結局、コサック兵の間ではなかつた。バーベリ自身、それを痛感しており、それを象徴するのが、日記の中に二度出てくる「俺はよそ者だ」(389、399)という言葉だろう。また彼は、従軍中、想像を絶する残虐さと破壊の連続をいやというほど見せつけられた。残虐さを発揮し、破壊行為を行なうという点では、前述のように、敵のポーランド兵も、味方のコサック兵も、変わりではなかつた。彼はまさに、「大きな止むことのない追悼祈禱」(402)に居合わせることになったのである。抽象的な革命の理念を抱いた、文明世界からやって来た知識人である彼は、そうした光景を毎日のように見せつけられ、精神的なダメージを受け、震撼とさせられた。こうしたことも、バーベリの孤立感を深めることになったのだろう。というのは、バーベリは残虐や破壊行為にはまったく不向きだったからだ。日記にも、「取ることができたけれども、何も取らなかつた、俺は駄目なブジョンヌイ兵なのだ」(371)とあり、さらに、日記の間にはさまっていた、出されることのなかつた手紙において、彼は次のように吐露している、

「僕はここで二週間の間、完全な絶望を耐え忍んできました。それはここでは一瞬たりとも止むことのない野蛮な残虐さのためであり、また、僕が破壊という行為にいかに不向きかをはっきりと自覚したからなのです」¹²⁾

コサック兵にとり、“よそ者”であるバーベリは、第一騎兵隊の中で孤立感を抱いていた。また、「大きな止むことのない追悼祈禱」、「一瞬たりとも止むことのない野蛮な残虐さ」のただ中であつて、彼の心は震撼とさせられた。震撼とさせられた彼の孤立感は、

残虐さや破壊行為に不向きであったため、一層強められたのである。しかし、そうしたバーベリも精神的な慰めを見出すことになる。いや、そうした状態にあったからこそ、精神的な慰めや救いを見出さないではいられなかったのだろう。果たして、彼はそれをどこに見出したのであろうか。

孤立感に苛まれ、震撼とさせられたバーベリの心は、自己の根源に、つまり、ユダヤ性に向けられた。彼は転戦していくさきざきで出会う自分と同じユダヤ人と向き合い、彼らとの交流やシナゴグでの祈禱などに精神的な慰めを見出すのである。たしかに、前述のように、第一騎兵隊の一員であるバーベリと現地のユダヤ人との間には、複雑な関係があった。しかし、孤立感に苛まれ、痛む心を抱いていたバーベリは、そうした状態にあったからこそ、「血を分けた」(366) ユダヤ人の方に心を引かれ、ユダヤ的なものに精神的な慰めを見出したのだろう。日記には、それがどのように表わされているのだろうか。次にみていこう。

孤立感に苛まれ、痛む心を抱いていたバーベリは、何よりも自分を理解してくれる話し相手を求めた。それが自分と同じユダヤ人だったのである。彼は行くさきざきでユダヤ人と話をかわし、鬱屈した心を晴らそうとする。その際、“ロシア人のふりをしたユダヤ人”という仮面を自ら脱ぎ捨てさえするのである。こうしたバーベリの心情は、7月21日の日記に記された、「年老いたユダヤ人、——私は同胞の者たちと話をするのが好きだ、——彼らは私を理解してくれる」(382) といった一文が如実に物語っているだろう。また、ユダヤの新年の9月13日には、バターを塗ったパンを御馳走してくれたユダヤ女性と長々と話しこみ、「私は涙を流すほど感動した、ここで役に立ったのは言葉だけだ」¹³⁾ (434) と記しているのである。バーベリは、このように、同胞のユダヤ人たちに自分を理解してくれる話し相手を求めた。第一騎兵隊の兵士の中にも、バーベリが心を通わせることのできた人間は皆無だったわけではないだろうが、バーベリがそうした相手として選んだのは、誰よりも、自分と同じ根源を持つユダヤ人だったのである。バーベリは、次章で述べるように、ヴォルイニやガリツィアのユダヤ人には違和感も覚えるのだが、とにかく、同胞のユダヤ人の中にいると、「私は幸せ」(363) だったのである。

また、バーベリが“ロシア人のふりをしたユダヤ人”という仮面を自ら脱ぎ捨てる場合について、付言しておこう。たしかに、バーベリは“ロシア人の仮面をかぶったユダヤ人”という自らに割り当てた役割を、従軍中、演じ続けた。特に、彼はコサック兵が一緒の場合には、なるべく自分がユダヤ人であることを隠そうとした。もっとも、それが常に成功するとは限らなかったし、隠そうとしても、彼がユダヤ人であることに気づいていた者もいただろう。それでも、彼は自分の役割を演じ続けるのである。そして、彼が自ら仮面を脱ぎ捨てる場合であるが、そのほとんどは一緒にいるのがユダヤ人だけの場合なので

ある。ここにも、彼がユダヤ人に精神的な慰めを求めたということが表われているだろう。

こうして、現地のユダヤ人に精神的な慰めを求めたバーベリは、当然、ユダヤ的なものにも引かれていく。それを象徴するのが、シナゴグでの祈りだろう。バーベリは、残虐さを見せつけられて痛む心の平安を取り戻そうとするかのように、シナゴグへ出かけている。例えば、7月23日と9月9日の日記には、シナゴグへ出かけ、祈りを上げたことが述べられており、さらには、6月3日には、ジトームルでツァディークのもとを訪れているのである。シナゴグはバーベリの痛む心を癒すのに、非常に大きな意味を持った。日記にも、「シナゴグの建物、昔からの建築様式、これらのものはみな、なんと私を感動させることだろう」(362)、「シナゴグでの静かな夕べ、それはいつも私に強烈に働きかける」(385)、「すばらしいシナゴグ、せめて我々に古の石があるのは、なんと幸福なことだろう」(393)と述べられているのである。

このように、従軍中のバーベリは精神的な慰めや救いを求めて同胞のユダヤ人やユダヤ的なものに向かった。幼少の頃から意識的にユダヤ文化に親しみ、生涯、自己のユダヤ性を強烈に意識していたバーベリが、極限状況に置かれて、精神の拠り所としてユダヤ性に向かったのも、不思議ではないだろう。さらに、そうしたバーベリにとって、この従軍はユダヤ人としての自己を再確認し、自己のユダヤ性を一層強く意識する場でもあったのだろう。こうして、精神的な慰めを求めてユダヤ人やユダヤ的なものに向かったバーベリではあったが、彼はヴォルイニやガリツィアのユダヤ人とは一体化することはできなかった。ヴォルイニやガリツィアのユダヤ人は、結局、バーベリにとって異質な存在であったのだ。精神的な慰めを求めたヴォルイニやガリツィアのユダヤ人がなぜ、バーベリにとって異質な存在であったのであろうか。次に、この点についてみていこう。

4

バーベリは、第一騎兵隊とともに、ヴォルイニを、さらには国境を越えて、ガリツィアを西へ西へと進んで行く。そこは、海に面した、陽光降り注ぐ、活気溢れるオデッサ出身の彼にとって、まさに異国の地であった。バーベリの日記にも、外国の風俗を眼にした観察者のような記述が目につくようになる。バーベリはガリツィアの町について、「ガリツィアの町の特徴は何だろうか。泥だらけで、重苦しい東洋（ビザンティンとユダヤ人）とドイツビールの西洋との混合である」(418)と言っているが、たしかに、ガリツィアやヴォルイニはオデッサとはまったく異なる土地であった。景色も気候も異なっていた。7月20日には、バーベリは「空中には言葉では言い表わせない憂愁、すべてが湿っぽく、黒ずんでいる、秋だ、だが、俺たちのオデッサでは……」(381)と述べている。たしかに、

そこは、「ロシアのマルセイユ」と呼ばれ、バーベリ自身、「頭と心の糧、すなわち太陽に満ち溢れた」（1935年10月9日付、A. Γ. スローニム宛書簡）と言っていた、オデッサではなかったのだ。さらに、オデッサと違うのは、景色や気候ばかりではなかった。歴史や伝統の面でも、違っていたのだ。オデッサは1794年に町の建設が始まった、新しく、開放的なコスモポリタン都市であったが、一方、ヴォルイニやガリツィアは長い歴史と伝統を有し、バーベリ自身、ベレステチコについて言っているように、「すべてが過ぎし昔と伝統に息づいて」（403）いたのである。こうした郷里とはまったく異なる土地をバーベリは転戦していくのであるが、そのうち、天候が悪化し、戦果も上がらなくなるにつれ、さらには、彼自身の体調も気分もすぐれなくなっていくにつれて、オデッサへの郷愁は強まっていくのである。日記にも、「オデッサはどうなっているだろうか、気がふさぐ」（389）、「ジェーニャ（バーベリの妻——筆者注）への手紙、彼女と家が恋しい」（391）、「オデッサ、心臓が止まりそうになった」（400）、「オデッサが恋しい」（401）、「俺はオデッサのことを考える、胸が張り裂けそうだ」（429）といった、オデッサへのノスタルジーを吐露した言葉が綴られているのである。そう、たしかに、「ちがう、ここはオデッサではない」（386）のであった。

ところで、このように、オデッサとはまったく異なるヴォルイニやガリツィアで出会ったユダヤ人はバーベリの眼にどのように映ったのであろうか。バーベリは現地のユダヤ人とオデッサのユダヤ人を比較して、「（現地の——筆者注）ユダヤ人たちはポートレー
トだ、背が高く、無口で、あごひげが長く、俺たちの太って、陽気なユダヤ人ではない」^{ジョヴィアル 14)}（382）と言っている。バーベリは後に、「機関銃車について」でも、ヴォルイニやガリツィアのユダヤ人とオデッサのユダヤ人とを対比して描くことになるが、たしかに、ヴォルイニやガリツィアのユダヤ人はオデッサのユダヤ人とは異なっていた。オデッサのユダヤ人は、バーベリの言うように、陽気で、快活だった。一方、ヴォルイニやガリツィアのユダヤ人はそうではなかったのである。上述のように、歴史も伝統も自然環境も異なる、オデッサのユダヤ人とヴォルイニやガリツィアのユダヤ人とでは、そもそも性格が違っていたのだらう。さらに、バーベリは、従軍中、ショレム・アレイヘムのアナテフカを彷彿とさせるような、シュテートルに閉じ込められた閉鎖的なユダヤ人にも数多く出会う。なるほど、バーベリは、シュテートルや小さな村落だけでなく、多くの立派な町並みを備えた都市をも転戦していった。例えば、プロディには、「《西欧》の文化」（393）があり、「アメリカのドルやラシャ」（393）があったのである。しかし、そうしたかつては繁栄していた町も、第一次世界大戦から続く戦火で「破壊され、略奪されて」（393）しまっていた。こうした戦火が、オデッサのユダヤ人とヴォルイニやガリツィアのユダヤ人との間にそもそもみられた違いをさらに増幅したのだらう。また、ヴォルイニやガリツィアには、18世

紀に発生した神秘主義的宗派ハシディズムの信者が数多くいた。バーベリの8月26日の日記にも、「中隊長トルゥノフ」で用いられることになる、ハシディズム教徒同士の論争の様子が描かれているのである。

このように、オデッサのユダヤ人とヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人は様々な面で異なっていた。オデッサとは異なる自然条件の下で暮らすヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人は、歴史と伝統を背負い、閉鎖された空間に閉じ込められていた、あるいは、そうでなくとも、うち続く戦火で疲弊しきっていたのである。彼らは、オデッサのユダヤ人のように、「太って、陽気なユダヤ人」ではなかったのだ。バーベリの日記にも、彼らは次のように描かれている、

「これらの地下から出てきた、信じられないほど貧弱な男女のユダヤ人。みじめで、見るもあわれな種族よ、前へ進め」(364)

「若いユダヤ人たちがやって来る、——平べったく、恐怖で血の気を失った顔の、魚のように生気のない眼をしたロヴノの者たちだ」(368)

「一晩中眠らなかったユダヤ人たちが、鳥のようにあわれに、あおざめて、髪をくしゃくしゃにして、チョッキを着て、靴下をはかずに立っている」(384)

「太った人間のなんと少ないことか」(405)

「恐ろしく、ぞっとするようなシュテートル、ドアのそばには死体のようなユダヤ人たち、俺は、これから先、お前たちにさらに何が降りかかるだろうかと考える、黒いあごひげ、曲がった背中、破壊された家々、そこで〔判読不能〕、ドイツ流の快適さの名残り、何か、言葉では言い表わせない、おなじみの、燃えるようなユダヤの悲しみ」(413)

「ユダヤ人街。筆舌に尽くせぬ貧しさ、汚さ、ゲットーの閉鎖性」(422)

「なんという落ち着きを失った、苛まれた人々」(422)

「やせ細った、若いユダヤ人たち」(432)

バーベリが転戦していくさきざきで出会うユダヤ人は、このように、恐怖におびえ、疲弊しきった、肉体的に脆弱な、生気を感じられないような存在なのだ。彼らには不幸に抗する力はない。彼らに残されているのは、不幸を語るユダヤ人の姿が日記にもたびたび描かれているように、せいぜい不幸を語る言葉ぐらいなのである。ヴォルイニヤガリツィアでは、『オデッサ物語』に登場してくるような、生気に満ち、生命感覚に溢れたユダヤ人に会うことは決してないのである。日記に記されたこのようなユダヤ人のイメージが、『騎兵隊』において、十分活かされることになるのである。

ところで、バーベリはなぜ、ヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人を異質な存在と考えたのだろうか。オデッサのユダヤ人のように“太って、陽気”ではないからなのだろうか。問題は、そのように、外見や性格が違うからといった単純なところだけあるのではな

い。もっと深い問題があるのであり、それは、ヴォルイニやガリツィアのユダヤ人たちがもはや崩壊と死を運命づけられた過去の存在であるということなのだ。バーベリは、「ユダヤ人のあばらやの内部には、みじめだが、力強い、絶えることのない生活が流れている」(405) ことを認める場合もあった。だが、そうした生活はもはや完全に過去の世界に属するものであり、そうした生活を送るユダヤ人自身も過去の世界の人間であることは明らかなのだ。日記にも、そうしたことを示す描写が数多く見出され、とりわけ、前にも触れた、ツァディークのもとを訪れた際の記述がそれを象徴的に示しているだろう。バーベリは6月3日にジトーミルでツァディークのもとを訪れているが、彼がそこで眼にした光景には「死滅と完全な退廃がきわめてはっきりと眼につく」(363) のであった。そして、多くのことを考えながら、彼はそこに集まっているユダヤ人たちに「さらば、死者たちよ」(363) という言葉を投げかけ、ツァディークのもとを立ち去るのである。そうして、この日の日記は次のような描写で終わっている、

「それから夜、列車、ごてごてと描かれた共産主義のスローガン（俺が老いたユダヤ人たちのもて見たものとのコントラスト）。

機械の動く音、自家発電所、自分たちの新聞、映画が上映されている、列車は光り輝き、轟音を上げ、肉づきのいい面をした兵士たちが洗濯女のところで順番を待っている（二日間）」(364)

「死滅と完全な退廃」の世界と、このような、バーベリを待っている、活力に満ちた現代的装置とのコントラスト。この日の印象は「師父」で用いられることになるのだが、このコントラストの意味は明らかだろう。こうしたコントラストを用いることによって、ヴォルイニやガリツィアのユダヤ人の世界が完全に過去のものであることが象徴的に示されているのである。言うまでもなく、「死滅と完全な退廃」が明らかなのは、ハシディズムのツァディークとそのもとに集まったユダヤ人という宗教世界に限ったことではない。それは、上で引用したユダヤ人の描写からも読み取れるように、ヴォルイニやガリツィアのユダヤ人全体について言えることなのだ。現代からとり残され、腐敗と死のイメージを喚起するユダヤ人の描写は日記に繰り返し現われ、そして『騎兵隊』においても、ユダヤ人はそうした姿で何度も登場してくるのである。

こうして、バーベリは、精神的な慰めや救いを求めたヴォルイニやガリツィアのユダヤ人とは、結局、一体化できず、彼らが自分とは異質な存在であることを見出す。それは、彼らが“太って、陽気な”オデッサのユダヤ人とは異なるからというような、単純な理由ばかりからではない。彼らはバーベリの属する世界とは完全に異なる、崩壊と死を運命づけられた、過去の世界の人間であったからなのだ。従軍中に26歳になったばかりの、次第に懐疑的になっていくとはいえ、まだ新しい社会に希望を抱いていた若者に見れば、

「死滅と完全な退廃」の世界に埋没してしまうわけにはいかなかったのである。そうした世界に、「さらば、死者たちよ」という言葉を投げつけなければ、前へとは進めなかったのである。

ところで、前述のように、バーベリは第一騎兵隊のコサック兵の中であって“よそ者”だった。それも、ユダヤ人であり、知識人であるという二重の意味でそうだったのである。だが、バーベリが“よそ者”であったのは、このように、コサック兵たちからばかりではなかった。バーベリは精神的な慰めや救いを求めた同胞のユダヤ人たちからも結局、“よそ者”であったのである。こうした他者との関係性は、バーベリの文学の特質を解く大きな鍵となるだろう。というのは、バーベリの文学は全体として、“よそ者”、アウトサイダーの文学として捉えることができるからである。例えば、『オデッサ物語』では、「鼻っ先に眼鏡、胸には秋風」（I、127）という語り手と、ベニヤ・クリークをはじめとした「モルダヴァンカの騎士たち」（I、123）との間に、そうした関係性が見出されるであろうし、さらに、日記から生み出されることになる『騎兵隊』では、語り手の多層的なアウトサイダーとしての立場を描くことが主題のひとつになっているのである。

さて、バーベリは、ヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人たちに引きつけられながらも、彼らから離れようとした。では、バーベリは彼らを完全に異質な存在として捨て去ってしまったのだろうか。いや、彼は、引きつけられながらも離れようとしたが、逆に、離れようとしながらも引きつけられていたのである。こうした相反する感情が日記全体を通して綴られているのであり、彼はさらに、ヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人を越えて、ユダヤ民族全体の歴史や運命に思いをはせることによって、ユダヤ人としての自己を再確認し、自己のユダヤ性を一層強く意識するようになるのである。彼はどうしてもユダヤとのつながりから離れることはできないのだ。こうしたことは日記にどのように表わされているのだろうか。次に、この点についてみていこう。

5

バーベリは、ヴォルイニヤガリツィアを転戦していくなか、戦争と迫害によって悲惨な状態に追い込まれているユダヤ人たちにいたるところで出会う。そして、彼らを見る彼の視線には、次第にひとつの要素が加わってくるようになる。それはユダヤ民族の歴史であり、彼は目の前にしているヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人の状態を歴史とのつながりの中で見ていくようになるのである。歴史への注視は、日記中の「シュテートルは400年経っている」（382）といったような簡単な記述にも表われているが、バーベリはヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人の状況をユダヤ民族の歴史とのつながりの中で見ることによって、彼らが置かれている悲惨な状態は一回限りのものではなく、歴史的に繰り返され

てきた状況のひとつであることに気づくのである。例えば、7月18日の日記には、次のように記されている、

「マリン郊外のユダヤ人墓地、数百年経っており、墓石は崩れている、ほとんどすべて同じ形で、上部は楕円形、墓地には草がはびこっている、この墓地はフメリニツキーを目撃し、今はブジョンヌイを眼にしている、不幸なユダヤの住民、すべてが繰り返されている、今やこの歴史——ポーランド人・コサック・ユダヤ人——が驚くべき正確さで繰り返されている、新しいのは共産主義だ」(377-78)

フメリニツキーというのは、17世紀半ばにポーランド支配に反旗を翻したウクライナ・コサックの指導者であるが、彼のコサック軍は大規模なユダヤ人虐殺によっても知られていた。バーベリはこうして、20世紀初めのヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人の状況を300年ほど前の状況の反復とみなすのである。

歴史の反復はそれだけではなかった。バーベリの思いはさらに、フメリニツキーの時代と空間をはるかに越えて、ユダヤ民族の遠き過去へと向かうのである。バーベリは7月24日にデミドフカにやって来るが、その日は第一神殿と第二神殿の破壊を嘆き、断食して、哀歌を朗読するユダヤの祭日、アヴ月9日祭だった。この日、バーベリはユダヤ人の家で、老婆の慟哭とその息子の哀歌の朗詠の中で、こう考えるのだった、

「小さなランプがくすぶり、老婆は泣きわめき、若者がメロディアスに歌っている、白いストックキングをはいた娘たち、窓の外はデミドフカ、夜、コサックたち、すべてが神殿が破壊された時のようだ」(387)

バーベリの思いは、このように、ユダヤ民族の遠き過去へと向かい、20世紀初めのヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人の状況をそれに結びつけるのである。ユダヤ民族の歴史の中にあったのは、“ポーランド人・コサック・ユダヤ人”という組み合わせだけではなかった。そこには、遠き過去より連綿と続く不幸の連鎖があったのである。バーベリが出会った20世紀初めのヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人たちは、この不幸の連鎖に捕われていることによって、ユダヤ民族の歴史に結びつくのである。この不幸の連鎖は、ユダヤ民族の運命とでもいうべきものであった。バーベリ自身もそのことに気づき、日記にもあるように、「ユダヤ民族の運命」(424)に思いをはせるのである。

こうして、ユダヤ民族の歴史や運命に思いをはせ、ヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人をそれに結びつけたバーベリは、自分自身もまた、ユダヤ民族の歴史や運命に結びついていることを再確認したのであろう。彼も、間違いなく、不幸の連鎖の中にある一人のユダヤ人であったのだ。こうして、バーベリはユダヤ人としての自己を再確認し、自己のユダヤ性を一層強く意識するようになっていく。それを如実に物語っているのが、これまでみてきたような、ユダヤ性が濃厚な従軍中の日記なのである。そのユダヤ性は、日記を公刊

する際の障害となっていたほど、濃厚なのである¹⁵⁾。また、ユダヤ人としての自己の再確認は、後の『騎兵隊』の構成そのものにも反映されている。『騎兵隊』は語り手のユダヤ性が徐々に強まっていくように、そして、ユダヤ人であることを隠そうとしていた語り手が、それを隠さずに、ユダヤ人としてのアイデンティティを確認していくように構成されているのである。それが最も明らかなのが、初版当時の『騎兵隊』の構成であろう。初版当時の『騎兵隊』は「ズブルーチ渡河」で始まり、「師父の息子」で終わっていたのである¹⁶⁾。つまり、ロシア人の仮面をかぶったままのユダヤ人が、徐々に、そして最後にはそれをすっかり脱ぎ捨て、ユダヤ人であることを隠さずに、師父の息子の最期をみとった時の様子を綴った手紙で終えられていたのである。

結 び

ポーランド戦争に従軍した“ロシア人の仮面をかぶったユダヤ人”バーベリは、ヴォルイニヤガリツィアを転戦中、いたるところでユダヤ人と出会い、様々なドラマを味わう。ロシア人の仮面をかぶっていたため、バーベリはヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人に対してそもそも複雑な関係にあったが、彼が彼らに対して抱いた感情も複雑なものだった。「大きな止むことのない追悼祈禱」、「一瞬たりとも止むことのない野蛮な残虐さ」のただ中で、震撼とさせられた彼の心は、精神的な慰めや救いを求めて、同胞である現地のユダヤ人たちに引きつけられた。しかし、彼らは結局、バーベリとは異質な存在であり、バーベリは彼らとは一体化することはできなかった。要するに、彼はヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人たちに対して、吸引と離反の感情を同時に抱くことになるのである。さらに、バーベリはヴォルイニヤガリツィアのユダヤ人たちの悲惨な境遇を歴史とのつながりの中で見ていくようになり、そして彼の思いは、彼らを越えて、ユダヤ民族全体の歴史や運命へと導かれていく。その結果、バーベリは自己のユダヤ人としてのアイデンティティを再確認し、自己のユダヤ性を一層強く意識するようになるのである。そうした場としても、この第一騎兵隊従軍は大きな意味を持つのであり、従軍中の日記にはそれが明白に表わされているのである。

こうした従軍中の日記は、バーベリのユダヤ性という観点からもはかり知れない価値を有する。バーベリは生涯、自己のユダヤ性を強烈に意識して創作を行っていた。そのユダヤ性は特定の作品というだけでなく、彼の創作全体にわたって滲み込んでいるのである。彼は、1913年にキエフの雑誌に発表したデビュー作『老シュロイメ』ではやくも、ユダヤ人を主人公に据え、ユダヤ人問題を取り上げている¹⁷⁾。さらに、『騎兵隊』やそれに関するものだけでなく、三つに大別されるその他の二つの作品群、つまり、オデッサを舞台にしたもの、少年時代を扱ったものにおいても、ユダヤ人が大きな描写の対象になって

おり、そのユダヤ性は明白なのである。また、沈黙の時代に入ってから、未完に終わってしまった『ユダヤ女』からも分かるように、バーベリはユダヤ性を意識して創作を行っていた。まさに、ナヒモフスキーの言うように、「20世紀ロシアの最も偉大な散文作家の一人であるバーベリはまた、最もユダヤ的であった。その時代と場所を考慮に入れるならば、彼の作品における明白なユダヤ路線は異例である」¹⁸⁾のである。しかし、「不幸にも、バーベリのユダヤ性という事実はこれまで、批評家からも研究者からもほぼ完全に無視されてきた」¹⁹⁾というジハーの意見もあるように、バーベリのユダヤ性という問題は、その重要性にもかかわらず、十分に研究されてきたとはいえない。それは、欧米の研究者はバーベリをヨーロッパ文学の伝統やヨーロッパ的な価値体系で捉えようとしすぎるからであり、ロシアでは、つい最近までユダヤ問題に触れること自体がほぼタブーであり、グラスノスチを経た現在でも、ユダヤ問題はかなり微妙な問題であるからであろう。このように、まだ十分に研究されていないバーベリのユダヤ性という問題を考える上でも、彼のユダヤ性が明白に表わされた第一騎兵隊従軍中の日記はきわめて重要なのである。

バーベリの第一騎兵隊従軍中の日記、それは、『騎兵隊』の素材となった人物や場面が記されているからといったことだけでなく、『騎兵隊』、そしてバーベリの創作全体のきわめて重要な要素となっているユダヤ性といった観点からも、非常に大きな価値を有するのである。

注

- 1) Nathalie Babel, Introduction to Isaac Babel, *The Lonely Years 1925-1939*, Verba Mundi, 1995, p.xv.
- 2) バーベリが従軍中の日記を草稿や手帳とともにキエフの友人M. Я. オヴルツカヤに預けたのを1927年頃とするのは、アメリカの研究者C. J. エイヴィンズが1993年5月にモスクワでバーベリの未亡人A. H. ピロシコヴァに対して行なったインタビューによる (See Carol J. Avins, Introduction: Isaac Babel's "Red Cavalry" Diary. —In Isaac Babel, *1920 Diary*, Yale University Press, 1995, p.lv, note 2)。この日記はその後、草稿や手帳とともに、オヴルツカヤから別のバーベリの友人T. O. スタッフの手に移り、そして最終的に、ピロシコヴァの元に移ったのである。
- 3) 現在残されている日記の最初の四日間、つまり、6月3日から6月6日の日付に関しては、誤りであるとする見解がある。すなわち、この四日間は6月ではなく、7月であるというのだ。これを最初に指摘したのはN. デーヴィスであり、彼は、その論拠として、バーベリは6月3日にはこの日の舞台となっているジトミルにいたはずがない、ジトミルはその頃はまだポーランド軍に占領されていたから、という点を挙げている (See Norman Davies, *Isaac Babel's "Konarmiya" Stories, and the Polish-Soviet War*, *Modern Language Review*, vol.67, no.4, 1972, p.847)。E. ジハーもこの見解を支持し、さらに7月説の論拠として、現存している日記の最初の記述は土曜日

でなければならないが、土曜日にあたるのは1920年の6月3日ではなく、7月3日であると述べている（See Efraim Sicher, The “Jewish Cossack”: Isaac Babel in the First Red Cavalry, *Studies in Contemporary Jewry* 4, 1988, pp.113-34）。この日記の英訳版も7月説を支持しており、6月3日から6日までの日付の月名の後に〔July〕と付け加えている（See Isaac Babel, *1920 Diary*）。また、エレンブルグは、1957年のバーベリの『選集』への序文で、理由は不明だが、『騎兵隊』のゲダリのモデルが登場する6月3日の記述を7月3日のものとしている（См. И. Эренбург, И.Э. Бабель. — В кн.: И. Бабель, *Избранное*, М., 1957, с. 5-6）。筆者もこの7月説は論拠が十分に強力だと思うので、この見解を支持したいが、この日記が完全な形で収められている唯一のロシア語の原典（注8）を参照する際に、誤解が生じないように、拙稿では、6月3日から6日はロシア語の原典通りに6月としておく。

- 4) Эренбург, И.Э. Бабель, с. 5-10.
- 5) И.А. Смирин, На пути к «Конармии» (Литературные искания Бабе́ля), примечания к «Из планов и набросков к «Конармии» — В кн.: Литературное наследство, т. 74, М., 1965, с. 467-82, 497-99.
- 6) А. Пирожкова и С. Поварцов, Первая Конная в боях и походах. — «Литературная газета», 1971, 3 ноября, № 45.
- 7) «Ненавижу войну» Из дневника 1920 года Исаака Бабе́ля. — «Дружба народов», 1989, № 4, с. 238-52, № 5, с. 247-60.
- 8) Дневник 1920 г. <конармейский> — В кн.: Исаак Бабе́ль, *Сочинения в двух томах*, т. 1, М., 1990, с. 362-435. 尚、バーベリの従軍中の日記の引用はすべてこの巻により、ページ数を（ ）に入れて、本文中に示す。また、バーベリの作品等の引用もこの二巻本の著作集により、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で示し、本文中に（ ）に入れて表わす。
- 9) Avins, *op. cit.*, p. xxxii.
- 10) これらの数字ならびに本文のすぐ下に出てくるデミドフカのデータは、Isaac Babel, *1920 Diary* のエイヴィンズの注による。尚、彼女がこれらの数字の典拠としているのは、デミドフカ以外には、Bohdan Wasiutyński, *Ludność żydowska w Polsce w wiekach XIX i XX*, Warsaw, 1930および、Всесоюзная перепись населения, М., 1927-29であり、デミドフカに関しては、Энциклопедический словарь, СПб., Брокгауз-Ефрон, 1890-1904である。
- 11) ここで“シュテートル”と訳したロシア語はместечкоという語であるが、この語をバーベリがシュテートルの意味で用いているというのはエイヴィンズによる（See Avins, *op. cit.*, p. xxxi）。
- 12) See Sicher, *op. cit.*, p. 115.
- 13) バーベリが現地のユダヤ人と何語で話したかは必ずしも明確ではないが、この場合の言葉とはイディッシュであろう。バーベリのイディッシュの習得は、家庭環境によるものではなく、完全に彼自身の意志によるものである。それは、彼の妹が、兄とは異なり、イディッシュをほとんどまったく知らないと言っているところからも明らかである（See Judith Stora-Sandor, *Isaac Babel: L'homme et l'oeuvre*, Paris, Editions Klincksieck, 1968, p. 19）。イディッシュの知識は従軍中、バーベリにとって非常に役に立った。それは、この場合のように、現地のユダヤ人と心を通わせるための手段としてだけではなかった。バーベリは、日記にも記されている通り、彼をロシ